**第６学年　社会科学習指導案**

２０１２年２月４日（土）１校時

東京学芸大学附属世田谷小学校

第６学年１組

男子１９名　女子１９名　計３８名

授業者　松本　大介

**＜授業の主張＞**

「学童疎開絵巻」「学童疎開を体験した先輩の作文」をめぐり、子どもたちはいろいろなことに気づいたり、自分の考えをもっていったりする。歴史的事象を一つの視点から見るのではなく、疎開した子ども、送り出した家族、教師、疎開先の人々などいろいろな立場の人から考えることを目指していきたい。そのためにも、一人ひとりが自分の思いや価値を言葉にして語り合い、仲間と聴き合う授業を大切にしていく。その仲間と聴き合う授業が、一人一人の子どもの歴史認識を深めることができると考える。

**１．小単元名**　「私たちの学校と戦争」

**２．本単元の目標**

○アジア・太平洋に広がって行われた戦争について調べ，戦争拡大の経緯や国民生活の様子，国内外の被害などについて理解を深めることができる。

○世田谷小学校の戦争中の子どもたちの様子を調べることを通して、自分が感じていた「戦争のおそろしさ」を問い直すことができる。

○「戦争のおそろしさ」について、図書資料や世田谷小学校に伝わる文化財や戦争資料を調べ、考えたことを適切な方法で表現できる。

**３．単元の評価規準**

|  |  |
| --- | --- |
| 社会的事象への関心・意欲・態度 | ●戦争の経緯や被害の様子、それが日本やアジアの国々の人々に及ぼした影響について関心をもち、意欲的に調べ、考えようとしている。●世田谷小学校と戦争のかかわりに関心をもち、当時の子どもの姿や学童疎開の様子を具体的に調べ、考えようとしている。 |
| 社会的な思考・判断・表現 | ●戦争の経緯や被害について学習問題を見いだして追究し、それがどのような背景のもとで、何を意図して行われたのか考え、そのあらましを適切に表現している。●見つけ出した「戦争のおそろしさ」と、今の生活を比べ、平和で民主的な社会をつくるための社会のあり方を考え、適切に表現している。 |
| 観察・資料活用の技能 | ●戦争の経緯や被害、国内外に及ぼした影響，戦争を体験した人から聞き取ったり，資料館、図書館などを活用したりして具体的事実やエピソードを調べ、まとめている。●世田谷小学校に伝わる文化財や戦争資料を活用して、当時の子どもたちの生活の様子を想像し、「戦争のおそろしさ」を見つけ出し、まとめている。 |
| 社会的事象についての知識・理解 | ●日本が行った戦争によって、日本やアジアの国々の人々に大きな被害がでたことがわかる。●子どもはもちろん、人々の生活が戦争のために大きく変化し、その変化に対して自由に考え、表現することができない世の中になっていたことがわかる。 |

**４．「私たちの学校と戦争」の授業構想**

**（１）この単元のねらい～「戦争のおそろしさ」を子どもたちと問い直す～**

昭和２０年の終戦から、今年の８月で６７年が経とうとしている。時代の経過とともに子どもたちの周りに戦争を体験した方が少なくなってきている。「ぼくのおじいちゃん、５０代だよ」という子どももいた。その一方で、海外に目を向けてみるとイラク、パキスタン、アフガニスタンでの戦争が現在も続いている。ニュースでは、兵士が銃をもち、戦闘機がミサイルを発射している場面が報道されている。１組の子どもたちは、ニュースや新聞に興味をもっている子どもが多く、子どもたちは、それらの映像を見ているであろう。また、「広島に原爆が落ちた」「戦争では多くの人々が亡くなった」ということを知っている子どもも多い。おそらく、「戦争は二度と繰り返してはいけない」「平和な世の中を築いていきたい」という思いをもっているだろう。・・・確かにそうである。でも、この「二度と繰り返してはいけない」という言葉にどれだけの「重み」や「思い」があるか。子どもたちと、その言葉を確かめたいという思いで単元を構想することにした。戦争のおそろしさは、何だろうか。大好きな家族の命が奪われること。たくさんの建物が焼き払われること。命や物が失われるということは子どもたちも想像できるであろう。戦争の恐ろしさは、命や物が失われるだけではない。「戦争反対」と思っていても自由に発言することができない、疎開先から親に悲しいという思いを伝えられないというように、「心の自由」がなくなることもあると考える。この「心の自由」を考えることにより、子どもは「戦争を二度と繰り返してはいけない」という自分の言葉を問い直すことができるのではないかと考える。

**（２）なぜ「先輩」の姿を通して戦争を考えるのか**

具体的には、「学童疎開」を取り上げることにした。本校は、１８７６年に開校し、３月１０日には、１３６回目の開校記念日をむかえる。１３６年の歴史の中には、学童疎開も含まれている。本校は、１９４４年に長野県松本市の浅間温泉に学童集団疎開を行っている。資料室を調べたところ、次の３つの資料を見つけた。子どもたちにとっては、自分たちの「先輩」が行ったことであり、考えたことである。以下の資料を通して「先輩」たちの姿や思いを追究することにより、今の自分の世田谷小学校の生活や家族の姿と結びつけ、「戦争の悲惨さ」「平和の大切さ」をより深く考えることができるのではないかと考えた。

　◆「学童疎開絵巻」・・・実際に学童疎開に行った山崎先生が、長野県での子どもたちの様子を絵巻

にまとめたものである。宿舎で過ごす様子、疎開先の学校などが描かれている。

　◆「望楠だより第一号（昭和二十年四月東京出発の日）」・・・初等科二年の担任であった川嶋貞夫

主事が保護者に向けて記した“学年便り”である。そこには、学童疎開の組織や教育内容、保護

者の心構え、教師の覚悟などが書かれている。

◆「疎開学園文集　富田の巻」・・・当時六年生であった子どもたちが、疎開しているときに書いたものを終戦後、担任であった木下先生が印刷し、綴じたものである。面会の喜び、薪拾いをした時の思い、東京の日に帰るときに子どもたちが考えていたことなどが記されている。

**５．主張に迫る手立て**

**（１）一人一人の疑問を大切にする→さまざまな立場から歴史を見る目につなげる**

　子どもたちの疑問は、大きな可能性を秘めていることは間違いない。「これはどういうことなの？」「こういう風にも考えることができるんじゃないの」という、一人一人の疑問を、みんなで考えていくことを大切にする。子どもたちにも、一緒に学ぶ仲間の疑問を大切にしてほしい。そのためにも、仲間の言葉をじっくり受け止めてほしいと願っている。話し合いをしている中で、仲間の言葉の一部だけをとらえて判断してしまう場面もある。仲間の言葉を表面的にとらえるのではなく、一つ一つの言葉を吟味して、思いを受け止めていって欲しい。弥生時代の米作りの学習をしているとき、「米を作っているムラに、作っていないムラの人が来たら、米作りの技術を教えてあげただろうか」という疑問が出された。米作りを巡って、水や土地をめぐって争いが起きてくることにつながっていく可能性もあると考え、私も興味をもった。狩猟採集生活における食料問題を調べて、命がけでお願いに来ているのではないかと考えたKAさん、自分たちのムラの支配下にはいることを条件に教えたのではないかと考えたHRくん・・・米を作っているムラの立場、作っていないムラの人の思いを想像しながら発言が続いた。仲間の疑問や、いろいろな立場から歴史的事象に向き合う仲間の姿を通して、さまざまな立場から歴史を考える大切さを子どもたちと考えていきたい。

**（２）“意味”や“背景”“つながり”を考えながら絵画資料・写真資料を読みとること**

　４月から、「想像図」や絵巻物などの絵画資料を読み取ることを多く取り入れてきた。子どもたちは、絵の細かいところに描かれたものを探すのが大好きであり、興味深く資料に向き合い、気がついたことをたくさん書き出すことができる。しかし、６年生の社会科の学習が始まった頃、縄文時代の想像図を見たときには、「上半身裸の人がいる」「土器をつくっている女性がいる」「男の人が魚をとっている」というように、見たままを書いていることがほとんどであった。そのような事実に気が付けることはとても大切なことではあるが、「上半身裸でも過ごせるということはどういうことなのだろう？」「男性と女性の関係はどうかな？」と、描かれている事象の意味や人と人のつながりを考えるように促してきた。“意味”や“背景”“つながり”を考えながら絵画資料・写真資料を読みとることを通して、追究していくことを導き出していく。

**（３）調べることを明確にして、調べる。そして、調べたことを基に考え、また調べる**

　多くの子どもたちは、「何か調べよう」となると、インターネットを使って情報を集める。キーワードを入力して、“検索”のボタンをクリックすれば、一枚の新聞をつくるのに十分な情報を手にすることができる。しかし、大切なのは集まった情報の量ではなく、「情報を集めて、何を明らかにするのか」という問題意識である。「どんなことを疑問に感じたのか」「どんなことを明らかにしたいのか」ということを、一人一人の子どもに明確に持たせてから、調べ活動に入らせていきたい。調べて終わりではなく、調べたことを持ち寄り、仲間と考え、話し合う時間を設けていく。自分が調べたことを聞いてくれる仲間がいる、調べたことを基に仲間と考える時間がある。そうすることにより、子どもたちは調べる意欲をもたせていく。

**（４）今まで学んだ歴史を振り返ることを大切に・・・“歴史を学ぶ意味”を子どもたちに感じさせていきたい。**

　塾や通信教育で６年生の社会科の学習内容を先取りしている子どもたちの声に耳を傾けると、歴史を学ぶことは、「歴史上の人物名や年号を覚えること」ととらえている子どもが多いように感じる。確かに、歴史について調べ、考えていくうえで人物や出来事の名前を覚えることは大切なことである。しかし、覚えるということにとどまることなく、子どもたちとは、“なぜ歴史を学ぶのか”ということを追究していきたい。そのためにも、それまでに学んだ歴史をふり返ることを大切にしたい。本単元で学ぶ「戦争」・・１時間目の学習感想に「戦争の悲劇を二度と繰り返してはいけないと思います」と書いている。「戦争はやってはいけない」「今、平和があるのは、先の戦争の反省があるからだ」「戦争は多くの人が死んでしまう悲しいことだ」・・確かにそうである。でも、この言葉にどれだけの「重み」や「思い」があるか。子どもたちと、その言葉を確かめながら学びを続けていきたい。

**（５）子どもが調べたことを授業の中で大切にする**

　子どもたちは共通して、教科書・資料集・地図帳の資料を持っている。この３つの資料からでも、多くの情報を得ることができる。教師から提示する資料はできるだけ精選していく。子どもたちには、自分の考えの根拠は自分で調べたり、見つけたりすることを大切にしていきたい。そのためにも、「自学ノート」の取り組みを大切にしていく。

　大切なのは、「もっと調べたいな」「調べなくちゃいけないな」「次の時間まで、一人ひとりが調べて、資

料を持ち寄ろう」というような場に授業がなっているのだろうかということである。子どもは、自分が調

べたことや考えたことを授業中、積極的に提示することが保障されているからこそ、自分から調べ、授業

に臨むのである。授業が、子ども一人一人にとって「自学＝自ら学ぶ」場になっているのか、自分自身に

厳しく問い直していきたい。

**（６）一人一人の子どもの思いをみとり、学習展開を修正する**

子どもたちが、“歴史を学ぶ意味”を考えたり、歴史上の出来事や過去の人々の生き方と、自分の生活

や現代社会の問題とを結び付けて追究していくためには、問題が教師から示されるのではなく、自分たちで追究していく問題を決めていくことが大切である。そのためにも、一人一人の子どもが、歴史上の人物にどのような思いを寄せているのか、どのようなことに疑問をもっているのかを把握する必要がある。そのために、学習感想や“自学ノート”の記述内容を整理し、その子の問題意識や思いをみとろうとすることを大切にしたい。ただ整理するだけでなく、朱書きをして子どもの疑問に共感したり、調べる方向性を促したり、時には追究の足りない部分を指摘するような壁となったりする。

　子どもの思いをみとっていくと、教師が予想したことではないことに子どもたちの問題意識が向いてい

ることもある。子どもたちの疑問は、大きな可能性を秘めていることは間違いない。しかし、子どもたち

の意識が向いていることに追究していく“深まり”があるかを見通す必要がある。“深まり”が感じられな

い場合は、子どもに戻し再考を促していきたい。

**６．学び続ける学級集団を築くための手立て**

**（１）自ら調べ、授業に参加すること→自学ノートの活用**

　子どもたちの主体的な学習活動を通してこそ、社会的事象のもつ意味を考える力を身につけさせることができると考える。子どもたちには、他人ごとではなく自分のこととして問題をとらえ、一人一人の子どもが資料を集めたり、自分の生活を振り返ったりして、授業に参加してほしい。

　そのような授業の姿を目指し、「自学ノート」の指導を行っていく。「漢字の練習をしなさい」「計算ドリルの５番を明日までやりましょう」という教師から示された宿題をやるのではなく、毎日の生活の中から疑問に思ったことを調べたり、授業で学んだことをさらに考えたりするなど、自分でテーマを決めて追究することを子どもたちと取り組んでいる。社会科の授業で追究していることから、問題意識をもったことを調べたり、考えたりしたことを書くことを大切にしていきたい。

**（２）友達の考えから自分の考えを見直していく→学習感想を読み合うことを授業に位置づける**

「相互に学習関係を生み出し、啓発し合う場」として、内山隆（1991年）は、「いっしょに学習していく仲間を、自分を変えていく“もう１つのかけがえのない教材”にしていくのである。つまり、個性や能力、生活状況も違う仲間が、それぞれの考えや判断を自由に交流させ、ある時は共感や協調を、ある時は対立や拮抗を重ねつつ、相互に啓発し合いながら進み、それぞれの自分らしさをより一層生かそうとし、集団の目標と同時に１人ひとりの目標の再生を具体化させていくのである。」１）と述べている。「相互に学習関係を生み出し、啓発し合う場」を目指して、学習感想を読み合い、互いの考えのずれを問題にしたり、友達から学んだりしながら考えを深めていけるようにしたい。

**７．児童の実態と本時までのストーリー**

**（１）社会科の学習から**

　６年生の社会科の学習では、「歴史」を学習するということに関して、歴史が大好きで昨年度の自学でも新選組について一年間調べ続けた菅田くんに代表されるように「楽しみ」という子どもと、「覚えることが苦手だから・・」という声に代表されるように「不安」を感じている子どももいる中でスタートした。最初に、「歴史を見つけた」という活動名で、「あなたが、“歴史を感じるな”というもの、こと、場所」を、見つける活動を行った。子どもたちが見つけたものは、「源頼朝の馬の墓の石碑」（MKくん）、「おさつ」（TSさん）、「７円の切手」（KAさん）など、昔のもの、昔起きた出来事を取り上げる子どもが多かった。その中でも、子どもたちの関心を集めたのは、NHさんが取り上げた「教室の机や黒板」である。NHさんは、「先輩たちが使った傷が残っているし、私たちがつかった跡も残っていく」ということを話した。歴史は、今の私たちの生活と切り離されたものではなく、つながっているものである。歴史の内容が終わった時に、もう一度「歴史とは何か？」ということを、この時間の板書をもとに考えたみたい。

　先ほども紹介したが、「想像図」を読み解くことから、気が付いたことを出し合い、その中から、「考えたいこと」「調べていくこと」を決めていった。縄文時代の学習から子どもたちの中で、気にしている歴史を見る一つの視点として「上下関係」ということがある。縄文時代の想像図を見ているときに、ORくんが「海の方を指している人がいる。この人は、魚がきたから船を出せ！と命令しているのではないか」という解釈を発言した。命令をするような人なのか、それとも見張り番のような人だったのかということを予想し、縄文時代の人々の生活について調べていった。二学期、豊臣秀吉の刀狩や検地等の兵農分離について考えていたときである。「厳しい政策を進められた農民は苦しかったのではないか」「農民の苦しさを分かっているから厳しいことをやったのではないか」という意見が続く中、ORくんは「もう農民は、戦いに駆り出されることはないから、そういう面からするとよかったんじゃない」と発言する。「でも」と手を挙げた古宮さんは、「でも、農民は農民の子どもとして生まれたら、農民にしかなれないんだよ」と投げかけた。その後、今の社会と比べながら自分の考えを発言する子どもが続いた。ここでも、「身分」「上下関係」ということが追究の視点となった。

　「身分」「上下関係」という視点をもちながら、支配する側、支配される側、武家諸法度という法律を作った江戸幕府側、決まりを守らさせる大名側・・・というように、さまざまな立場から考えることを大切にしようとしている子どもたちが多い。

**（２）学び続ける学級集団を築くための手立てから**

　**①自学ノート**

中学年から取り組み始め、５年生の１年間も取り組んだ自学。自学を６年生でもスタートするに当たり、「自学」という言葉の意味を改めて考えた。子どもたちとは「自分で学ぶ」「自由に学ぶ」ということを確認した。自分で追究することを自由に選び学ぶことを目指すこととした。「自由に学ぶ」という言葉はとても魅力的だが、簡単なことではない。５年生で取り組んでいる様子を振り返ると、ニュースで話題になっていることを調べる、新聞記事の切り抜き、都道府県調べ・・・なかなか一つのことにじっくり取り組むことはむずかしい。多くの子どもたちは、毎週１回欠かさずに提出している。しかし、「提出する日があるから取り組んでいる」という雰囲気もあった。そこで、子どもたちに、「授業で学んでいることをヒントに取り組んでみたらどうだろう」ということを再度、投げかけた。調べる必要性や切実感をもって、自学に取り組んでほしいという思いからであった。授業の中で、仲間と追究していることを自学で調べる。それを次の授業で発表したり、調べたことを基に自分の考えを発表したりする。自学と授業が、つながり合っていくことを支えていく。

６年生の自学の中で、社会科の授業に合わせて次のようなことを調べてきた子どもがいた。休日に上野の東京国立博物館に出かけ、土器や埴輪を見学してきたことをまとめたNMさん、家の近くの古墳を調べてきたIWさんなどがいる。そういう子どもは、積極的に授業の中で取り上げ、話し合うときの大切な材料としていった。また、戦国武将を調べているSYくんもいる。戦争の学習が始まり、自学で戦争について調べてきている子どももいる。KAさんは、祖父母に戦争中の生活の様子を聞いている。また、OSさんは、疎開の話を祖父から聞き取りノートにまとめていた。今後の学習の中で、聞き取りをしている子どもたちのノートを取り上げる場面も考えていきたい。

**②学習感想を読み合う**

学習感想を読むという活動は、５年生の４月から行っている。最初の頃は、漠然と仲間の学習感想を読んでいた子どもが多かったので、「大事だなと思うところや、気になるなと思うところに線を引きながら読んでみよう」と声をかけた。次第に、線を引くだけでなく、余白部分に質問を書いたり、反対意見を書いたりする子どもが出てきた。そのような子どもたちの姿を全体に紹介していくと、仲間の感想を読んで自分の感想を読み直したり、中には書き加えたりする子どもも出てきた。５年生の最後には、学習感想を読み、仲間の思いや考えに気付いたり、自分の考えを再確認したりして授業を始めることは、社会科の授業の流れとなっていった。

６年生の社会科の授業でも学習感想を読み合うことを大切にしてきた。４月、子どもたちに「仲間の学

習感想を家で読んでくること」を提案した。NHさんは、「人によって、読む時間が違うから、家で自分のペースで読んできたい」、WYくんの「読むのに時間をつかうより、自分の意見を言ったり、仲間の意見を聞くのに時間を使ったりした方がいい」という意見もあり、感想を読んで授業に臨むこととした。TSさんのようにノートに感想を読んだ後の自分の考えを書いてくる子どもがいる一方で、読んでこない子どもも見受けられる。子どもたちの様子を見ながら“感想を読んでくる”という学習の“約束”を見直したり、仲間の感想を読む視点をはっきりさせるなどの工夫をしたりしてきた。

本単元でも、学習感想を読み合うことを大切にしている。この頃、「○○くんの感想に書いてあった必要な戦争ということが気になったんだけれど、どういうことなのかな」「□□さんの戦争は大規模なゲームという言葉をもう少し説明して欲しいな」という子どもたちの発言が目立つようになってきた。「このことは、どういうことかな」「この言葉は、きっとこういうことじゃないかな」というふうに仲間の考えていることや思っていることを想像しながら感想を読んでみるように私も促してきた。学習感想や発言にこめられた仲間の思いの「根っこ」を受け止めようという姿勢を大切にしていく。

**８．展開計画（全１４時間扱い）～学びの履歴と今後の構想～　（１月３０日段階での構想）**

**＊１時間目から５時間目の授業の様子については別紙の「学びの履歴Ⅲ」に詳しく書いてあります。そちらも合わせてご覧ください。**

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| **次** | **時** | **これまでの学習の流れと今後の展開の予想** | **○教師の手立て及び留意点****◆授業後の振り返り** |
| Ⅰ | ① | ●「戦争は何か？」という題で、今考えていることをノートに書く。 | D:\DCIM\100OLYMP\P1240958.JPG |
| ②③ | ●前時に書いたノートを基に、クラス全体で「戦争とは何か？」ということを話し合う。 |  |
| ④⑤ | ●「戦争」について気になっていることを調べる。・「戦争が１５年間どのように続いたのか」「戦争がなぜ起きたのか」「どのような被害があったのか」「子どもはどのような生活をしていたのか」などを教科書・資料集・図書資料を使って調べる・●調べ活動を行い、考えたことをノートに書く。 | ○調べ活動を始める前に、前時までの感想で「調べてみたいこと」を書いている子どもに発言を促し、調べていくことを学級全体で話し合い、一人一人の子どもに調べることをはっきりさせる。 |
| Ⅱ | ⑥30日 | ●「学童疎開絵巻」を手がかりに、学童疎開の様子を想像する。D:\DCIM\100OLYMP\P1301020.JPG・絵巻にかかれている絵や文から世田谷小学校の先輩たちの疎開先での生活の様子を想像する。 | ○絵巻を読む前に、学校の歴史を振り返り、戦争と世田谷小学校の関係を理解させる。◆「悲しそうな顔をしている子はいなかった」と感想に書いてあるように、描かれている子どもの表情まで真剣に見ている子どもが多かった。感想を整理してみると、「思っていたより普通の生活」という子どもが多い。その一方で、描かれてはいない「不安な気持ち」を想像している子どももいる。その感じ方の違いを出し合う中で、学童疎開にある「不自由さ」に迫っていきたい。 |
| ⑦ | ●学童疎開出発当日に出された「学年便り」を読み、学童疎開が行われた理由や、学童疎開に向けて学校が準備したことや送り出す家族の様子を理解する。 | ○「学年便り」に書かれている、手紙を自由に書けないなどの「不自由さ」に気づかせ、「学童疎開中の作文」を読む目的をはっきりさせていく。 |
| ⑧⑨ | ●「学童疎開中の作文」を読み、先輩たちの姿から「学童疎開にある不自由さ」を考える。（個人追究） | ○作文を読む前に、前時の板書の写真を配り、「読んで何を考えるのか」を確認する。 |
| **⑩****本時**⑪ | ●「学童疎開の作文」を読んで考えたことを基に、先輩たちがどのような生活を送り、どのようなことを考えていたのか考える。（クラス全体での学び） | ○先輩の学童生活の姿とつなげながら考えることができるように、作文のどの言葉から、考えたのかをはっきりさせながら発言するように促す。 |
| ⑫ | ●原稿用紙に「私たちの学校と戦争」という題で、先輩たちの残した作文を読んで考えたことをまとめる。 | ○学校に残っていた先輩たちの文集のように、作文を書くことにより「戦争のことを受け継いでいく意味」を子どもに考えさせたい。 |
| Ⅲ | ⑬⑭ | ●１時間目に書いた「戦争とは何か？」という問いに対して、自分の考えを書き、全体で話し合う。●今回学んだ「戦争のおそろしさ」をもとに、平和で民主的な社会をつくるための社会のあり方を考える。 | ○単元の最初の時間に書いた考えを読み返し、自分の考えがどのように変わったのか、自分の考えの根拠がどこにあるのかを一人一人に考えさせていく。 |

**９．本時の展開　＊１月３０日段階での構想です。当日、詳細な本時案を配布させていただきます。**

（１）ねらい

「疎開学園文集・富田の巻」を基に、学童疎開にある「不自由さ」について考えることができる。

（２）展開

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| ねらい | 予想される子どもの学習活動 | ●評価（観点）【評価手段】○手立て　＊資料　 |
| ◎仲間の考えを読み、自分の考えを見直す。 | **①仲間の学習感想を読み、同じ考えの仲間や違う視点で考えている仲間の意見を読み、自分の考えを見直す。**・食べ物が十分になかったということを書いている仲間がいるな。物がない不自由さあるかな。・家族に会えた時の喜びから、家族に自由に会えないということも「不自由さ」になるのかな。 | ＊前時の学習感想（前時の最後に、学童疎開にある「不自由さ」を一人一人ノートに書いたものを担任が打ち出し、前日に配布）○自分とは異なった視点で考えている仲間の意見に気づかせ、自分の考えを見直すように促す。 |
| ◎学童疎開にある「不自由さ」について考える。 | **②「疎開学園文集・富田の巻」を基に、学童疎開にある「不自由さ」について全員で話し合う。**・面会にお母さんが来てくれた日、旅館でお母さんと過ごしたとき本当に嬉しそうだった。普段の生活では「お母さんに会いたい」という気もちを表せない。・手紙を自由に書けないということもあったから、自由にものを書いたり言ったりできなかったのも「不自由さ」になるんじゃないかな。・薪拾いに全員で行っていた。「嫌だ」というわがままは許されなかったんじゃないかな。集団で行動しなくてはいけないのも「不自由さ」だよね。千倉の臨海学校は、自分で考えて過ごせる時間もあるよね。・いつ終わるかわからないというのも「不自由さ」というか、苦しさかな。 | ○どの資料から考えたのかをはっきりさせていく。場合によっては、絵巻や文集に戻って全員で確認する。○「物の不自由さ」と「心の不自由さ」の意見を分けて板書し、「不自由さ」にもいろいろあることに気づかせていく。○今行われている、臨海学校と比べることにより、自分たちの今の生活と学童疎開の「不自由さ」の違いをはっきりさせていく。 |
| ◎本時の学習を振り返り、改めて学童疎開にある「不自由さ」について考えを書く。 | **③学習感想をまとめる。**・物がないというだけでなく、考えや思いなど心の面の不自由さがあったのだと思う。・みんなに合わせて行動しなければならない時間が多かったのは、きっと苦しかったと思う。・東京に帰る日の作文をみんなでもう一度読んでみたい。どんな思いで東京に向かったのかを考えたい。 | ○仲間の発言を受けて、自分の考えを見直していくとともに、これからの学習の進め方も考えるように促す。●学童疎開にある「不自由さ」を様々な視点から考えることができたか。【思考判断表現】（発言・ノート） |

**１０．引用・参考文献**

１）次山信男・羽豆成二編（1991）　「子どもが追究する社会科の授業　５年」教育出版p3

○次山信男・羽豆成二編（1991）　「子どもが追究する社会科の授業　６年」教育出版

　○田所恭介・鎌田和宏（2009）「移行期からはじめる新しい社会科の授業づくり　３～６年」日本標準

　○東京学芸大学附属世田谷小学校（1995）「相互啓発学習〈１〉**個のよさが生きる授業」東洋館出版社**

**○**東京学芸大学附属世田谷小学校（1996）「相互啓発学習〈２〉**個のよさが生きる学校」東洋館出版社**

**○**東京学芸大学附属世田谷小学校（1966）「わが校九十年のあゆみ」

○東京学芸大学附属世田谷小学校（1976）「百年の回想」

○岸野存宏「平和で豊かな世の中をもとめて～「戦争のかっこよさとおそろしさ」～

　　　　　　　　　　　　　　　　　　東京学芸大学附属世田谷小学校研究紀要４２（2011）

○内藤幾次（2001）「学童疎開」同成社

○北島万次・峰岸純夫（1986）「歴史を学ぶこと教えること」東京大学出版